

袋草紙注釈 上

小沢正夫
後藤重郎
島津忠夫
樋口芳麻呂
共著

袋草紙注釈

小沢正夫 後藤重郎
島津忠夫 樋口芳麻呂
共著

上

塙書房刊

袋草紙注釈 上

昭和48年度文部省補助出版

昭和49年 3月30日 第1版第1刷
昭和51年 6月20日 第1版第2刷

定価 7,000 円

検 印
廃 止

著 者 小 沢 正 夫
後 藤 重 郎
島 津 忠 夫
樋 口 芳 麻 呂
発行者 白 石 静 男

発行所 塙 書 房

〒113 東京都文京区本郷3-6-10
TEL (812) 5821・振替 東京 0-8782
中 央 精 版 印 刷 ・ 鈴 木 製 本

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

3091—6940

はしがき

和歌の研究の歴史は相当古い時代まで遡れるが、最初に集大成された時期は十二世紀の後半に当たる平安時代末期といえよう。藤原清輔はそういう時代の和歌研究の大成者の一人であり、父祖以来和歌の創作と研究において顕著な活動を続けて来た、いわゆる六条藤家の柱石として多方面の業績を現今に伝えている。

彼はひと言でいえばやはり宮廷歌人であり、貴族としての地位の昇進には不満も多く、また和歌によって自分の家を繁栄させるために最大の努力を払ったことは当然であろう。その著述は彼と何らかのつながりのあった皇族または上層貴族を対象として執筆されることが多かった。こういう環境から生まれた彼の学風は、早くから仏門に入り、やがて仁和寺の守覚法親王から研究の便宜を与えられた弟の顕昭法師とは自然違うものになっている。どちらにしても、六条家の人々の業績は日本の学問史上で注目すべきものであり、とりわけ父祖からの伝承や現代では散佚した諸文献を引用している点などは、今日の和歌研究者にとってすぐれた資料的価値をもっている。

清輔の著述には散佚してしまった大部のものもあるらしいが、現存するものでは学者としての実力を十分に發揮できるところになったところに書かれた『袋草紙』と、それより少し若い時代の『奥義抄』とを主著とみるべきであろう。

歌学書としての性格は、『奥義抄』が和歌の形式や修辭の解説、歌語の解釈などを行ったのに対して、『袋草紙』は歌

会出席者の作法、『万葉集』『古今集』以下の諸歌集の成立事情、歌人の逸話や作歌事情、歌合の次第などのような、いわば和歌の動態に照明を当てて研究したもので、現代の研究者に注釈を必要とするのは『袋草紙』の方である。

この書は写本で伝えられるものが若干あり、近世の版本、「続群書類従」「歌学文庫」に収められた活字本などもあるが、現在読みやすい形のものとして一番利用されているのは「日本歌学大系」第二巻の所収本であろう。「歌学大系」が本書を普及させた功績はむしろ大きい、校訂された本文だけで注がまったくないので、まだ相当に難解である。私たち四人は一九六六年の初夏から、毎月一回の輪読形式で本文の読解を始め、七一年の秋にはいちおう下巻の終わりまで到達した。昔から部分的に引用され、論証に利用されて有名となっているくんだりは少なくないので、そういった先人の研究はできるだけ参考した。しかし『袋草紙』の全体にわたる注解としての、私たちの仕事はまだ不完全であろうことはいうまでもあるまい。それにしても、この五年間の輪読のノートが基礎となったので、七二年春以後に手分けをした原稿執筆は比較的順調に進んだのである。また本文の順を追った注釈書の形式をとってはいるが、内容的には『袋草紙』を諸方面から総合的に研究したものであり、さらに下巻の終わりには多少詳しい解説をつける予定である。

六条家の人々の業績は研究条件の必ずしもよくなかった平安末期の動乱の間に上げられたが、彼らと歌風・学風が対照的だった御子左家の人々ほど派手なものではなかった。しかし、これを歴史的にみれば、彼らこそ平安時代と鎌倉時代の分岐点に位置するものとして、広い範囲の研究者に種々の角度から注目され、検討されるべき多くの問題をもっている人々である。また、『袋草紙』は芸術的創作ではないが、これを精読すれば著者清輔の個性も平安末期の時代色も随所ににじみ出ていることが分かる。私たちのささやかな共同研究の成果が、動乱時代の種々の困難にたえ

て研究を遂行した一歌学者への認識を一段と深める機縁となることをも望むしだいである。

なお、本書の刊行には、一九七三年度研究成果刊行費を文部省から受けることができた。そのことと塙書房編集部
の熱意とによって、出版が順調に進行したことを感謝している。

一九七三年一〇月一〇日

著者しるす

凡 例

本書は、『袋草紙』上巻を、目次・本文一三〇節・奥書に区分して揭示し、『校訂』『通釈』『語釈』『補説』の五項にわたって論述したものである。解題・索引は下巻に添える。

一 本 文

(1) 底本には国立国会図書館蔵本(ほ二一)を用い、神宮文庫蔵本(三・四五〇八・二二)・静嘉堂文庫蔵本(五〇二・一九)・島原松平文庫蔵本(一一七・一九)・内閣文庫蔵本(二〇一・五九五)・東京教育大学蔵本(ル二〇五・六)・貞享二年板本・統群書類従所収本の七本により本文を校訂した。

(2) 漢字・仮名は通行のものにより、句点・読点・濁点・返点を施したほかは、漢字・仮名の区別、仮名遣いなど原文どおりとし、斎宮(斎宮)・皇太后(皇太后)・堀川(堀河)などと原文にある場合はもとのままとした。

(3) 底本の傍書・割注は原則として底本どおりにしたが、割注形式で記されてあっても、本来本行本文にあるべきものと認められるものは、これを改め「校訂」欄においてその由をことわった。また割注形式ではないが、小字一行書の注記形式のものは割注に準じて扱った。また「云々」「并」等の底本に特に小字で記されている文字の

大小の相違や、行かえは必ずしも原文どおりとせず、改めた。

- (4) 本文の右傍に注記した細字の数字は、校訂欄との照合数字である。

二 校 訂

- (1) 底本の誤りと思われる点を、他本によって改めた場合にのみ校訂を付記した。従って、底本をそのまま立てた場合の校訂本相互の異同は、特に必要と思われるものについては、「語釈」欄に注記したが、おおむね省略した。なお、底本の誤りと思われる点で、他本により、校訂を施し得ないところは、私に本文を改め、意改として、本欄にその異同を掲出し、その理由は「語釈」欄で説明を行った。

- (2) 本欄の記載の順序は、最初に本文との照合数字、校訂した本文、() 内に校訂に用いた本の略符号を掲げ、――を付して底本の本文をあげ、() 内に「底」と記し、更に底本と同じ校訂本の略符号を記し、更に校訂本の異文を注記した。

- (3) 本欄の本文は、底本・校訂本とも、句点・読点・濁点・返点は施さないままに掲げ、漢字・仮名の異同、仮名遣いの相違は異同とみなさない。異文の表記は、それぞれ最初に略符号をあげた校訂本による。

- (4) 本欄に用いた校訂本の符号は左のごとくである。

底〓底本 神〓神宮文庫蔵本 静〓静嘉堂文庫蔵本 松〓島原松平文庫蔵本 内〓内閣文庫蔵本
教〓東京教育大学蔵本 板〓板本 類〓続群書類従所収本

なお、底本以外の校訂本がすべて一致している場合は「諸本」とした。

三通 積

(1) 通積は右の本文を口語訳したものであるが、後に続く語積と補い合って理解が十分なることを目標とした。従って通積だけ独立して完全な理解がえられるものとは限らない。

(2) 本文の頭注・傍注は通積から省いた。巻頭の目次を始め名詞ばかりを列挙したところも数か所だけこれを省いた。

(3) 本文の割注の部分は通積では「」内に入れた。

(4) 本文における明らかな誤りは、通積では前後の状況によって訂正した場合と、そうでない場合とがある。この種のものの特に「語積」欄を参照せられたい。

(5) 本文以外のものを参照して通積を行った場合（例えば本文には上の句だけが記された歌の下の句など）には、（ ）によってこれを示した。

(6) 神宮文庫本の本文の傍訓に従った場合には片仮名のふり仮名を施した。

四語 積

(1) 単語・句・文節の意味や文法語法の説明にとどまらないが、おおむね叙述は簡明をこころがけた。

(2) 文脈・語法に関することや特殊の用法と思われる古語については通積に譲り、語積を省いた場合もある。

(3) 人名については、著名なものは記載事項は『勅撰作者部類』の程度にとどめたが、特に該当の節にかかわると

ころは詳記し、著名でないものには比較的に詳しくした。

- (4) 和歌については、本書以前の出典を記し、「通釈」欄との重複をさけ、掛詞・縁語などの技巧を注記するにとどめた。

- (5) 語の訓は歴史的仮名遣いにより片仮名で示した。

- (6) 同じ語や固有名詞を二か所以上で説明している場合には、原則として最初の方を詳しくし、↓印で項目番号をしるし、前出当該箇所を参照するよう示した。

- (7) 勅撰集については、部立と国歌大観番号を、『俊頼髓脳』『奥義抄』『無名抄』については、日本歌学大系（新版）のページ数を付記した。

- (8) 「語釈」「補説」の引用文については、割注は「」で一行に記した。

五 補 説

「語釈」欄が、主として当該する章節の範囲内で処理できるものを扱ったのに対し、本欄においては、節全体にかかわるものについて記述した。

本書は、昭和四十一年より、毎月一回、小沢正夫・後藤重郎・島津忠夫・樋口芳麻呂により輪講した結果をまとめたものである。本文・校訂・語釈・補説は後藤重郎・島津忠夫・樋口芳麻呂が、通釈は小沢正夫が素稿をつくり、相互に検討を加えた。

本書本文の底本として所蔵本の覆刻を許可せられた国会図書館をはじめ、口絵写真の掲載および校訂本の閲覧・写真撮影を許可せられた神宮文庫・静嘉堂文庫・島原松平文庫・内閣文庫・東京教育大学付属図書館ならびに同大学助教授桑原博史氏に厚くお礼申し上げます。

目次

はしがき	一
凡例	五

本文

〔目次〕	七
和歌会のことへ一・二	二〇
題目の読み方へ三	二七
位署の読み方へ四	元
題目の書き方へ五	三
位署の書き方へ六	三
和歌の書き方へ七	三七

探題の和歌へ八〇・一〇〇	三
御賀の歌の作法へ一一・一二	四
白紙を置く作法へ一三・一四	五
和歌に注を書くことへ一五	六
和歌の詠草をいただくことへ一六	七
和歌または連歌を詠み出すことへ一七	七
連歌の作法へ一八・一九	八
大嘗会和歌の次第へ二〇・二二	八
和歌の序に関するしきたりへ二三・二四	九
勅撰集に関するしきたりへ二五	一〇
古い撰集の詳細へ二六・五一	一一
人麻呂は平城天皇時代まで生存しがたいことへ二八・三四	
万葉集撰定の時期をある人は平城天皇時代といい、ある人は桓武天皇時代かと疑うことへ三五・三七	
諸歌集における人名の不審についてへ五二・五三	二〇

雑談〈五四～一〇六〉	三二四
------------	-----

希代の和歌〈一〇七～一三〇〉	四二七
----------------	-----

〔奥書〕	五二七
------	-----

（右の項目名は、本文巻頭に付せられた目次〔二七ページ参照〕の口語訳で、その項目に関する章段数をへゝ内に、ページ数を下に示した。）

